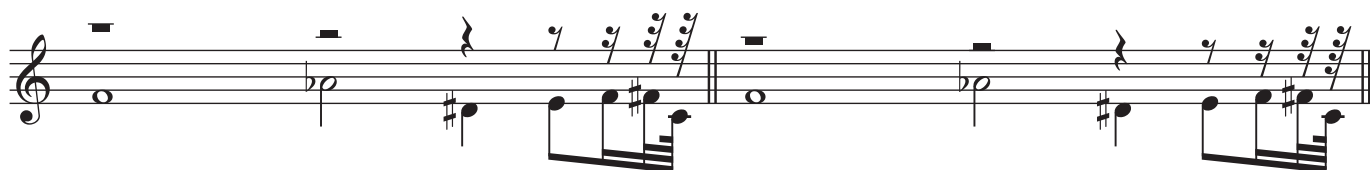


## 休符の原則 その3



休符の位置には厳格な規則があります。上例の1小節目が正しい配置例で、全体休符はその上辺を第4線に付け、二分休符はその下辺を第3線に付ける。四分休符はその底の角が第2線に付くか付かないのところに置く。そして八分休符はその玉が第3線に来るように置き、それ以下の休符ではまず下に玉を追加して、次は上、その次は下と言った具合に増やしていきます。Finaleが自動的に実行してくれるものの一つで、単声部の楽譜を作るだけなら多分この基礎知識は要らないでしょう。意図的に動かさない限りは決して2小節目のようにはなりません。けれども多声の楽譜となると、他声の音符を避けるために休符を縦に移動させることが多くなります。その場合には、2小節目のように全体休符・二分休符の位置付けが逆になって五線内に休符用の加線が出現してしまうこと、あるいは四分休符の角が線間に来たり、八分休符以下の玉が線上に置かれたりすることが変だと思えるだけの感覚が必要です。プラグインを使おうと、マウスで動かそうと、Finaleのプログラムは休符をどこにでも置けるようになっているのですから。



二声部の楽譜としてみると、自動的に休符群が垂直に移動してくれます。デフォルトファイルの設定によるもので、休符を自動的に移動させる距離として、上声に充てるレイヤー1には6ステップ、下声に充てるレイヤー2にはマイナス6ステップという数値が入力されています。ただ、この設定が万能というわけではなく、多くの場合で適切な調整が必要になってきます。ここでは2小節目のように少し下げた方が良いでしょう。「休符の移動」というプラグインを使うのが手取り早い方法で、本例はマイナス2ステップ移動させています。可能ならば、本例のように休符各種の基本的な縦位置関係を保った移動が望ましく、その意味でもプラグインによる一括編集が好都合です。一個ずつのマウスドラッグでは間違った場所に置かないように注意しなくてはなりません。ただし、レイヤー設定やプラグインの数値に奇数のステップ数を入力してしまうと、自動的に基本位置以外の全ての休符の縦位置が誤りになってしまうので、これはこれで要注意ではあります。

今度の譜例は歌物です。メロディーと歌詞とコードネームだけの楽譜ですが、二段目のように特徴的な伴奏音が入ることもあります。小玉と言いますが、一般にその音符・休符が縮小されますので、特に休符の縦位置には注意しなくてはなりません。

本例は最近の私の仕事から採ったものですが、こういった歌物では発注者から移調楽譜の追加依頼を受けることがあります。これはFinaleの「調号設定」を適切に変えれば、音もコードネームも自動的に正しく移調表記されます。けれども音が変わればコードネームや歌詞の縦位置も変えなければなりませんし、時に符尾や連符の再調整や再スペーシングも必要となりますので、細かい手入れが欠かせません。ハ長調に移調したものの二段目ですが、歌詞・コードネームとコーダ記号は位置調整済みです。問題は休符で、旋律部、伴奏部ともに縦位置が誤っています。特に旋律部は縮小されているだけに見落としやすいでしょう。どこにでも休符を置けてしまうというFinaleの弱点が露見された例です。本例の場合は1ステップ間違っていると見て、当該小節を選択してからプラグインでレイヤー1、レイヤー2ともに1ステップ上げれば一気に解決できます。この操作自体は簡単で手間もかかりませんが、そもそも自動で出された結果が間違っていることに気づかなければ始まらない話です。演奏技術の習得に音感というものがある不可欠な如く、良い楽譜製作の為にも正しい知識と鋭敏な感覚が不可欠ということかと思えます。